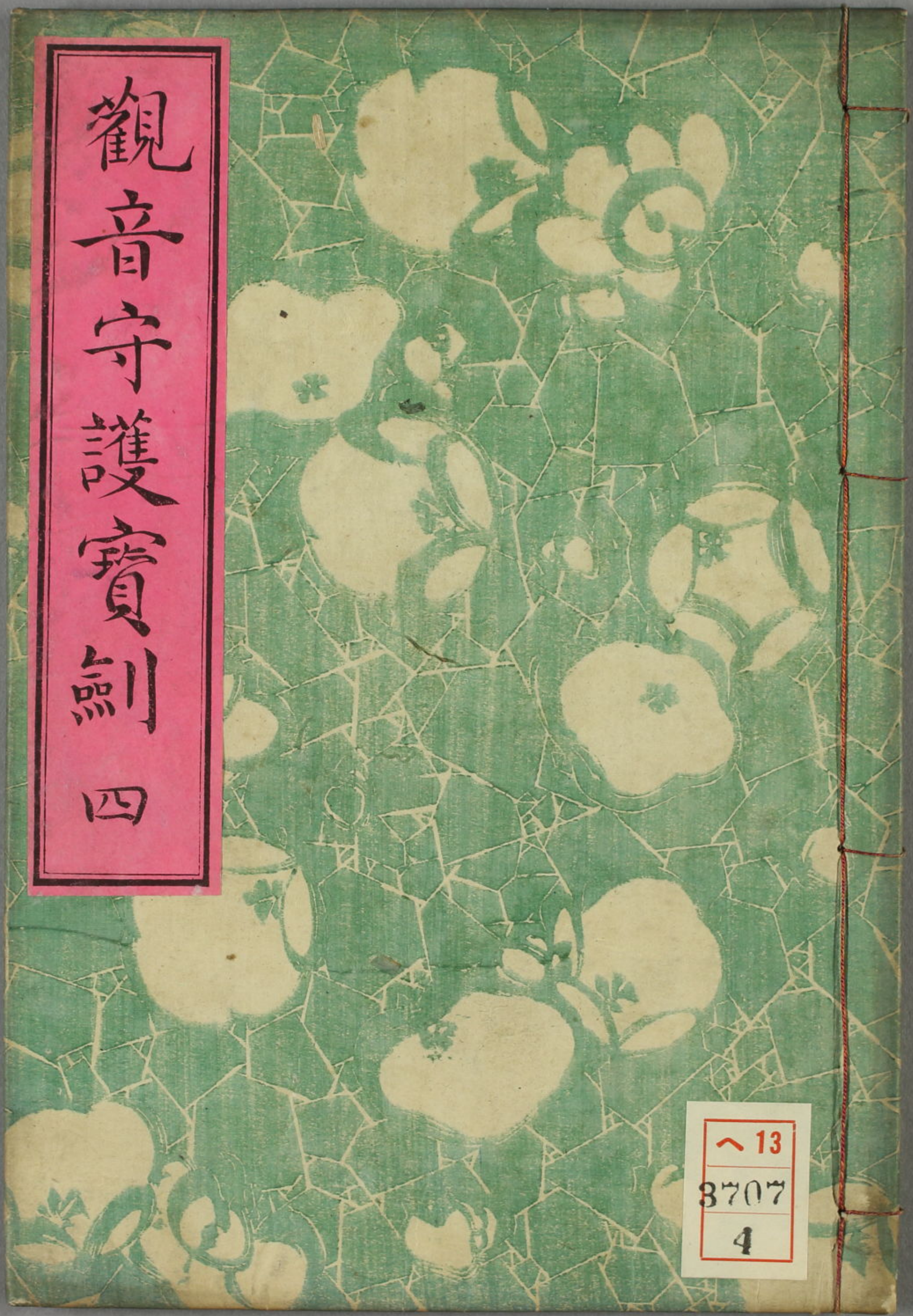


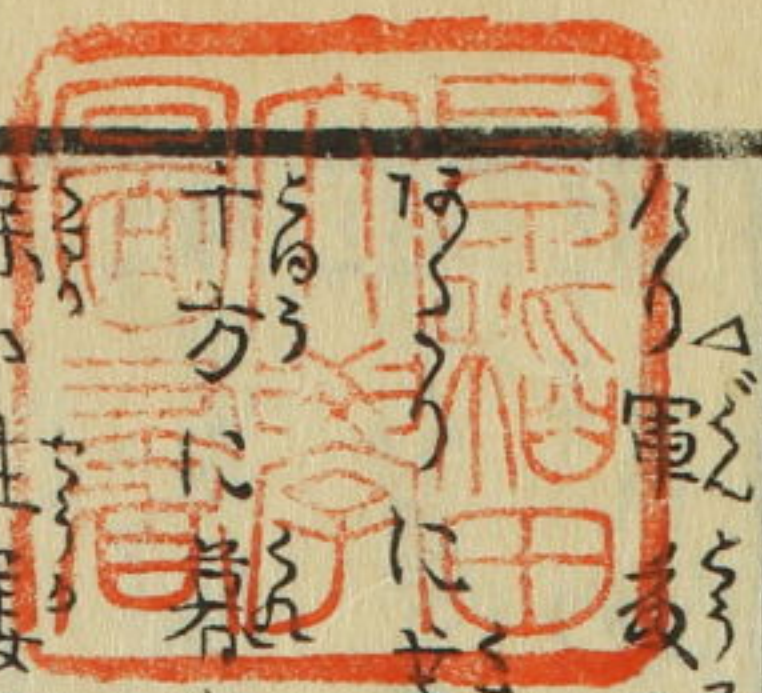
觀音守護寶劍四



~ 13
3707
4



門へ13
號3707
卷4



軍六の雲芥の正体さるは怪しき先は是はたさしんせ
はるに赤は求まじいもの用りば病とも弁はるが自ら
一方に煎る居るは良はる風と思ひ出ぬる先は渠が盛ら
茶の生葉はくは灸湯に与るは是の病も異るは彼の生葉
が蕃椒を換湯は則水は換へ用わづはは空に鶏ふとの
氣絶ちたる辱用り即功はきざり良葉あるとやが
蕃椒水と濁へ切雲芥と押動り先指はゆる脈は引肢は撫
件の水は面より口の中に洒るくは雲芥怒多の覺るは地に
眼と見開き息出ら軍六の横手は打く感悦し我らこれ者
扁鵲の再来るべし希代の医業は廻り人の命は助け
程は莫大の謝禮を受ぬことやあつとや云ふは足下に見下

天徳新書卷之四

十一

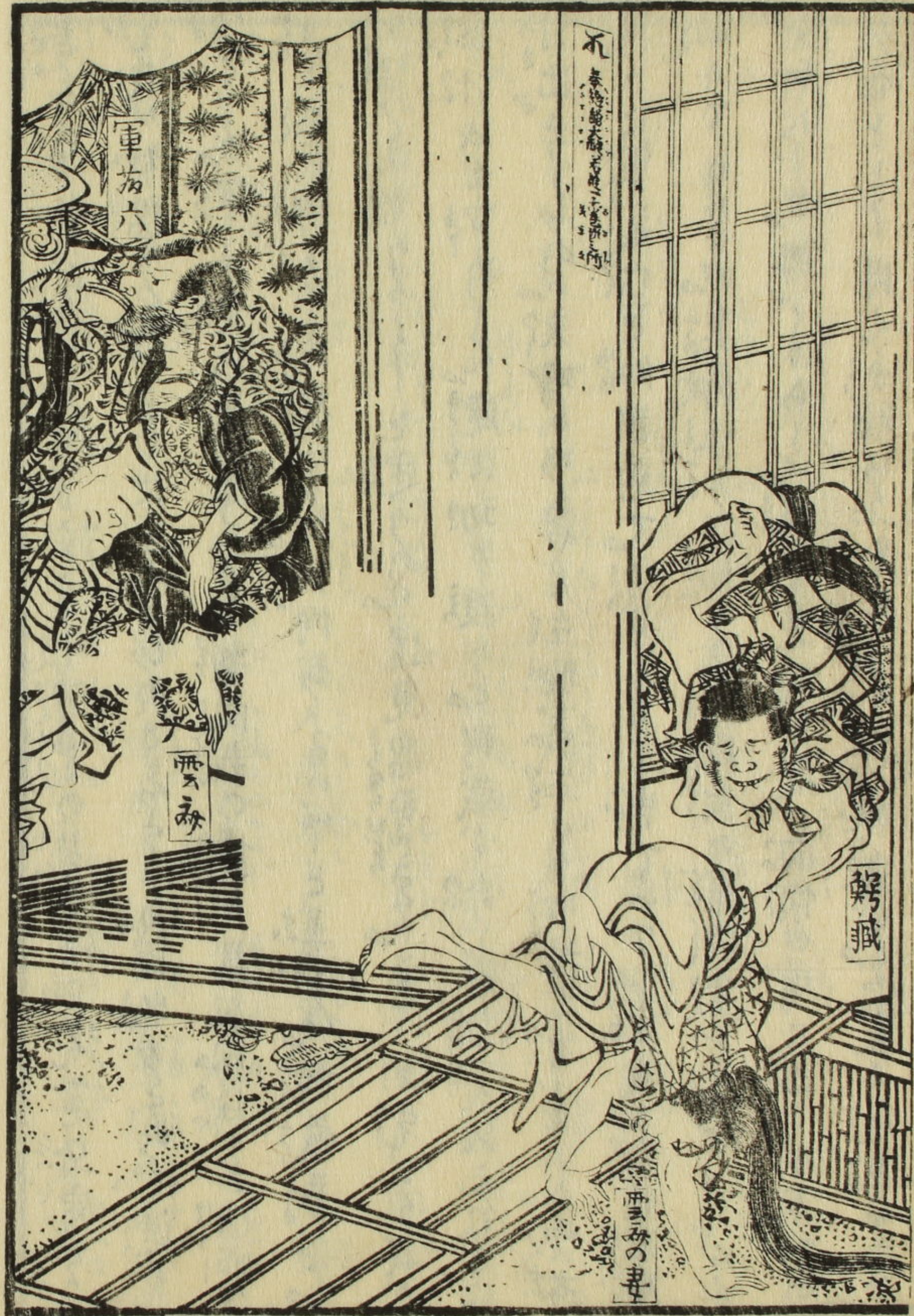
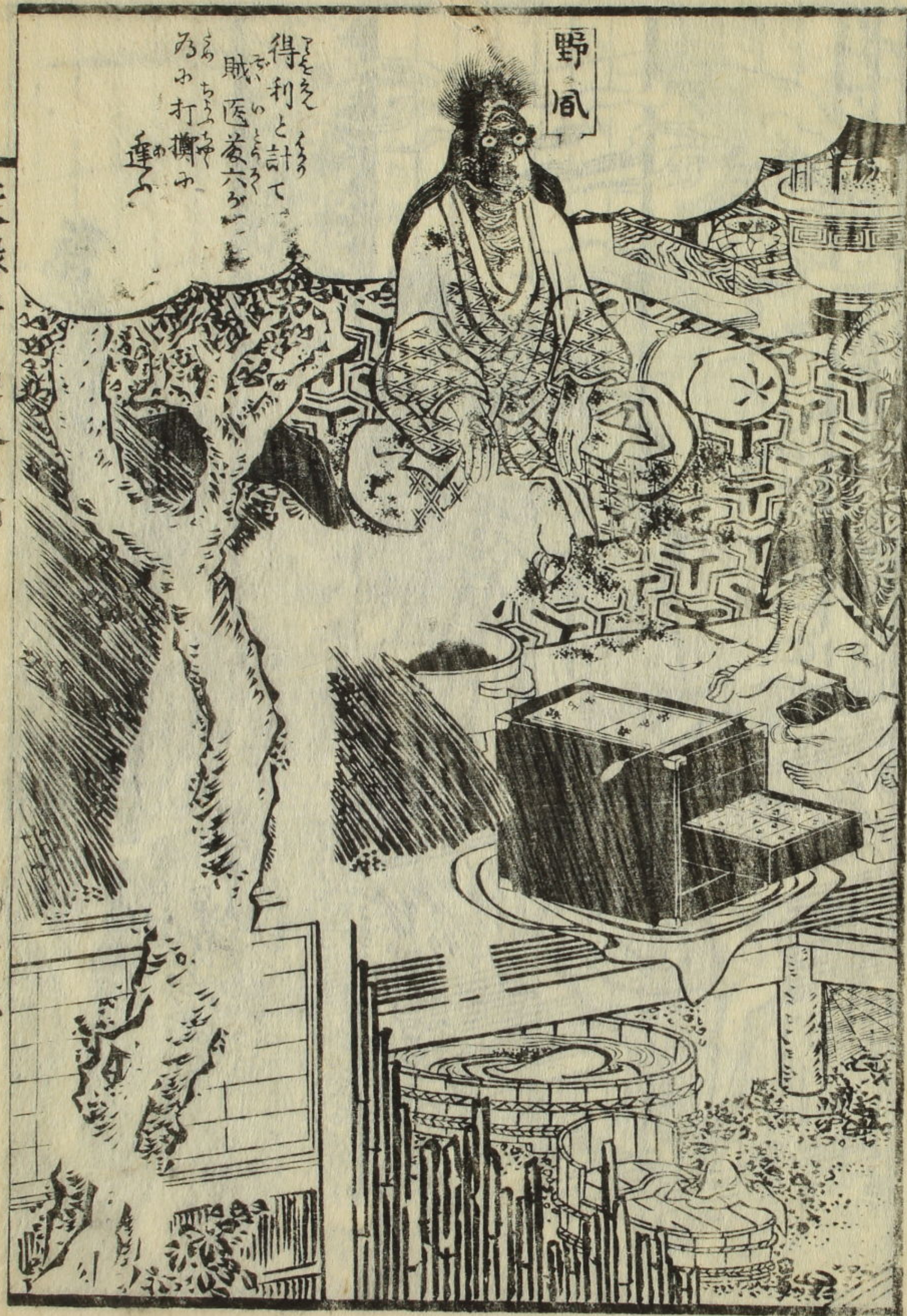
大正十年八月九日
寄
本大學附屬
贈

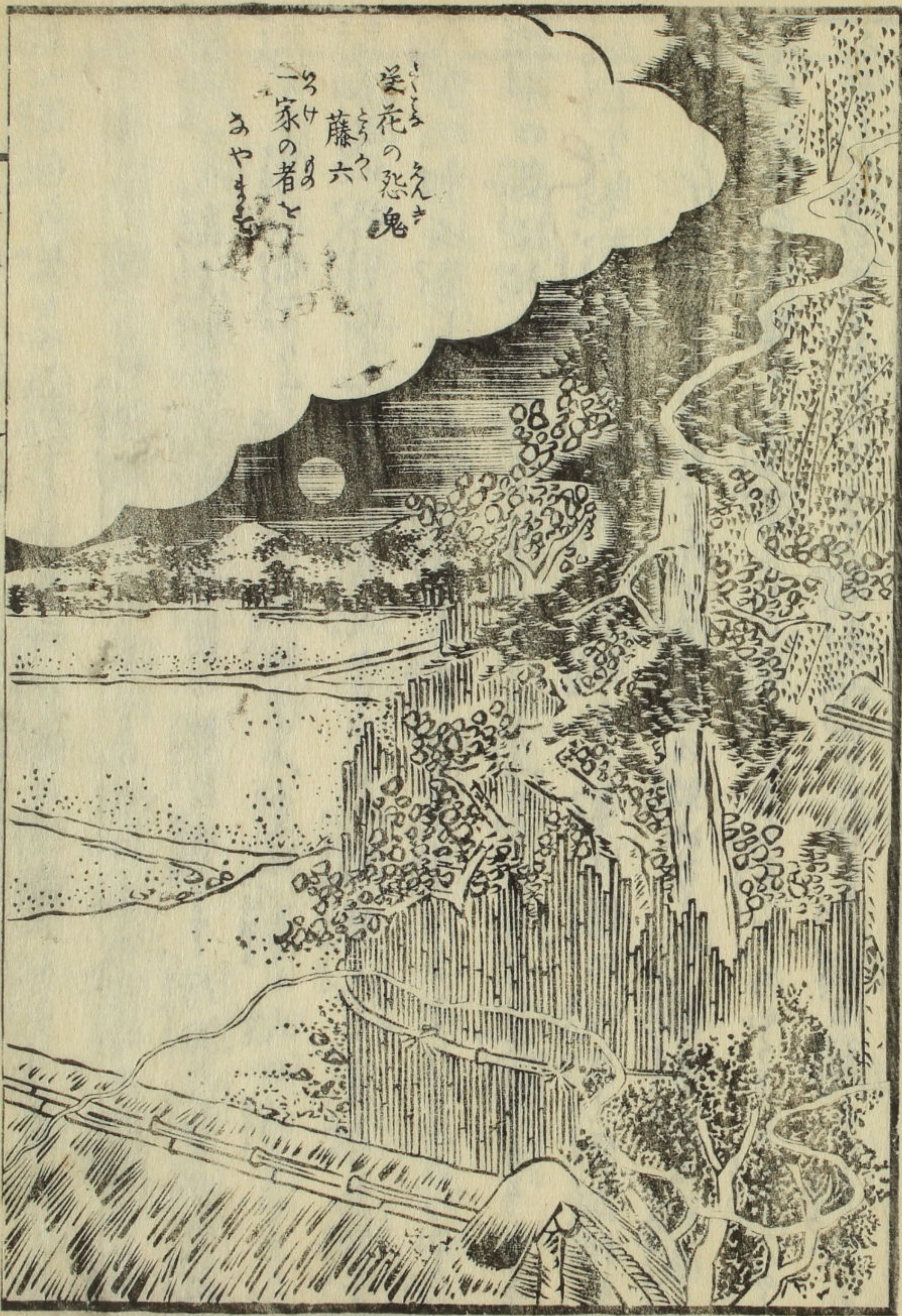
女庸医我とあまぐらうら 廣言吐し病者ににらるる手段も
 め 判へは死病と引出し 此のごとく我に救はるは恩は知らぬ
 財と惜まぐ 我の謝礼は厚くせむ 命と財とりのする重は只
 此言は舟へし やらくと示し 白根の坐しぬが雲霧流石に
 言葉多く 戒は御落し 命を助ぬが何如る 謝礼はも致す
 べし 町もきど 少の金錢を 貯るが 國に 運に
 贈る 必無忽に存ぞと 天窓は捨るぬ 財や 軍を 方につぐり
 め 又も 我の欺人と 謀るも 今 金錢は 使へ
 女は衣服茶箱の類の 皆 我に 得るや 運に 速く
 殺すぞと 傍に 都合の 刀は ぬき 雲霧が 呪に 突くぬ 此の
 忽ち 合せし 仰に 任し 命を 再助 せぬと 此の

歎きぞ 歎きさ 衣服と 腹と 与へるや 彼方の
 一向に 正体と 見黥さん と 擲つ 責つ 野藏が 女の 衣服は 利
 取ら 庭上に 投出さ 雲霧見より 走り
 寄り 何更ぞと 労も 俾も 只見合し 右様を
 とうも 壱さば 壱狐に 如く 所へ 鬼塚公 御入
 りと 守り 寄ら 道見が あずの 本下は 引俱し
 とうくと 入来ら 上座に 坐さ 戦後六は 始と
 野藏も 平伏し 懇懇に 應へる 時に 遁見軍 六に 對し
 云 我今 茲に 彼こに行き 鹿戎の 味方と 設けぬ
 大に 軍勢は 集め 速く 足利家は 攻亡は 木曾川
 畠山の 兩管領と 誅戮せん 只 軍用に 備へ 全の

如何にせん之にも今味方の手配りしに在く
 所々に押下し往還を劫奪しは多量の財宝を奪ふべき旨命ぜし
 りどさざりし手段に十少の利と得ん覺束たりければ又別に
 ばと謀り近國を掠取り目覺しきやぞ殺の宝を財財へと思ふ
 ありはがむいり日とつ横島忽點頭つ是に對つて云けるや
 夫子は方便のそへは年支度寺の觀世音に開帳す
 抄はありはるが来月の七日のりり六十の口と限り其ことは
 執行ふかに定りる遠近の諸人老若となり貴賤となく峰の
 如くに集つ時東西の道と妨げ尽く金銀衣類と奪り
 夏臣にやの難しとせ又茲に幸ひある臣が妻頃口奇病
 受て身に九十九の口と生ぜり是と彼の道場に持出して兵

善く冬詣の人に見せむとて子千万の施物を得んと必定せり
 先我が智謀くみごとくにさめぬとさるり貞に物ごめ道見
 少くも安んは是は奇なりと物前裁の傍と見ると怪しき法師が
 女と共に裸きては居る如何なるものぞと尋るに鮮藏答へ
 け様くの者なることと述ぐの道見忽怒るこそと先より我が
 密計はすめし速に切り殺せと鮮藏は命と二人はこれに
 引出さるるの夫婦は多量と立駭ぎ生くる心地も有さるが雲を
 頼りに軍を六と仰ぎ見て噫きながら告ていつ今我が命は三度
 助くありは其味方に加りて庶幾の軍用金と捧ぐべし
 如何に捧ぐるありは我く夫婦も彼の開帳の場に出く千万の
 施物ととも得ん手段あり先其仕りとと御覽せと雲奇の疾妻が手と





咲花の怨鬼
藤六
一家の者
あやま

二ノ家

二ノ家



天竺高僧の巻

咲花の怨鬼

携へ出向ひ居りし声より上げ抑相撲の僧禰天竺神の御代も
神の傳へて道とや物朝庭にのりてり重仁帝の御時に相撲の
會行りぬ其後聖武天皇の南良の都に在りて行司の式と立あひぬ
夫より遙に世下りて坐頭角舐とて野に善く人の將とや
其法式の扱別はくくやの盲人くくやに則婦人と立合せ四十
八手の手は尽し大に勝負と争う其時其はくくのづ
君子の奥に入ぬとてとて見せんとと夫婦ゆるとも
立上り曳声出し押合し程多く妻は傍に投出し雲太極ぞ
勇しげに立ちたりこれぞ道見は始めとて軍後六も野藏
大にこれと賞嘆し嘯采くと登立をて手下のやうも打與
志ざらぬとて軍後六はくく先刑と衣服と

持出褒美と呉くと投出せ夫婦は伏し恩と謝し是より並に
道見が手下に下りし属し

第五 韵

物も其後支度寺の観世音菩薩當寺に於て開帳の文を
賢賤老若連綿とて運びて往來斬くも絶さるしは
道路に切取剛盜と働く者夥しく出来りて多し人
遠遊は沙汰はりて申の刻と限りて人々故路は急ぎ
時鬼塚道見の手下の賤徒と四方に分る冬詣人の賤物と奪
り其身の爰に支度寺の程近き松原に徘徊し青野原の
むしは思ひの態故にもおらんと老らる松の根をにほつ往還

うらふ所ところに田舎大尽おほいぢんと覺おぼし余多あまたの奴僕ぬやくは左右さゆうに引ひ俣ひし静しずこと
 此所こゝに歩来あゆまるは道みち見みるつと出でる先まづ奴僕ぬやく等らは切倒きりたせ大盡おほいぢん
 へつと逃出にげだると襟えり髪かみ揃そろへ引ひぬぐ無二無三むにむさんに衣服いふくと利取きり
 ぬる魚うい幾いくの金かねと覺おぼしと洞どう巻まと奪うばひらう裸はだかなる大盡おほいぢんを情なさけなくも
 十向じゅうぞり突飛つとし其その俣ひもの松蔭まつかげにぞ隠ひそるいぬ夕陽ゆふやう乃
 空あかまる又また此こゝとらに來きるやとさかたに仕つかる士しと覺おぼし五三人ごさんにん
 連つららる大小おほいぢん袴はかま立流たてりゅうと尽つしづぬも衣き著きたりぬ道みち見み
 密ひそに思おもへ此こゝ者もの共どもと残のこる剥取はくる十じゅう分の獲えあふと疾はや道過みちと
 討うんとせしむるに彼かのの田舎大尽おほいぢん打うと剥取はくる容ゆる易やすく
 手てに入いぬとさかたにも慮おぼさる心出こころ來きにぬら甲斐かひと
 身みと堅かめ軍ぐん前に奪うばひらる衣服いふく堅かうらぐの金かねと松まつの洞ほらに遠とほく入いる

やて連つららるる二ふたの跡あとに添くつ、技足わざあししとぞ歩あむにく士しども斯かとも
 知しらば只ただ口くちに開帳ひら場の趣おもて杯はと語かたる行ゆくもの物もの一人ひとりが
 云いふ足下あしもと彼の女め戲馬あそびうまとらぬのい見みゆるや起立たてあり倒拖たひ横載よこ狭せ駈か
 班馬尾はんばおしるくの曲まがとなし果はに妹い婿山むよやまの四よの口くちつ所ところの淨瑠璃じゆるり
 狂言きやうげんのいとやせしと脚色きゃくしきとら皆馬みなうまと自由じゆう自在ざいに乘廻のりまわし其その奇きある
 吉原きちげんに言語げんごに迷まぐとれ只ただ我われの是こゝを見みて切きに悲かなし催もよほす事こと
 夫その如何いかなるが馬うまの固かまり武ぶの備そなへに拵かす宜よろ第一だいいちのものるらう或あるは
 民家たみかに農のと扶たすけ重おもきと荷に徳とくなるる雜劇ざがくの用もちに俣ひく末旦すえだんの
 足あしどうしとく遠とほへのやう子こ躍なると馬うまのいりうらう苦くるくくらうて
 活計かつかいの為ためなるが止とまは得えぬとら候さうともしりあかきと彼の武器ぶきと
 穢けちる罪つみの甚こどしとらいりやん是こゝ我われが切きに悲かなしむまに侍さむらいなりと

天鏡奇選卷之中

仕へるに五拾把の薪と推ねる白昼に行くこと能く自然日暮は
 待得つゝくめぐりて路の程はもろく走りて草鞋の
 緞解る傍の松の根もとに休む堅くと直しやがて又行くとやが
 何れもは松の洞を見よに裡に人の屈く尾をくさくさ采吉忽
 ら甘き物に及びて式往還の盗賊ありと不敵にも手ひきつべ
 らつと押んど引出せり如何に人に何れぞ三つ程の衣服より
 取上見せ下より金の貳十両をかり入りと覺し胸巻も出さ
 らるゝくと見せり采吉はなんか衣服とせよの洞に押入へりいせ
 うらぶらぶら手にとりて押戴きこゝ観音の授けあるものありし我
 今十五支ともをりぬと君父の仇を報ふべき手段もあらず母乃
 何れう姫君の申行衛をも尋ひ奉りて空しく月口と過ぬること

曾て我が本懐はらうれど一とび賊の爲に誑きされて勘太がら
 身は賣らるれば我が身と我が身のまゝな奴とありて仕へる斯身の
 代の金ぶらるる人の忽地かゝの暇をもひく疾く人々はくかぬ
 ぞ一あり有がやくと天に仰ぎ地を叩いて観音菩薩に禮拜し
 さるはても賊の奪へる金にせらるれば人の身の上は庶幾
 の難儀なりて叶ふまじしは人の人々金や借し我小貸し
 我本懐を達せしむといふはもして廻り合ひ此時の恩に謝して
 返さるべしはば観音堂へいそがんと道とどくし骨圍り
 志渡寺さして歩むむうううの鬼塚道見彼の士に盡く剥取
 と覺しくはらうの衣服と肩にかけ五腰の大小と腰をさんでまづくと
 帰り來ぬる采吉と透しえて赤りやいとの獲ありと心のうち

ほろく敵びやがて道路に妨げ何ともなき米吉が存りに遅れはたふ
 寄るたりに除れはむらりに添て掴み殺さんおれちうまを然るは米吉の
 腰に一の短劔とふ帯おりたれはいつか兵法と得てゐるも聊足ふ敵軍
 がく唯除るはの如トと思ひてか形くちまに身はむらけは思ひぬりて
 来一道に押りどされぬやぐて道見高きうに呼りうらふは小童身は纏
 える衣被と皆盡く脱て得させよさうは命を失ふべきぞと先を奔る
 刀ぬきて米吉が咽に突かれは米吉さぞがまらえか縁からくと打
 りふひてぬれと尋常は小童と見るや衣服のあらう草鞋ゆくも
 脱くは魚へはとやせし除て通せよと若坊が目ふ物見えんと尋
 と握りてまるとしはいつと健氣ももく地よとまはしく眼前敵とも
 知らざりしと斯く猛勇ある道見に一刀とも持どして向は是に突る

風前の燈よりと危うくと水が道見の犬に怒くこの大膽成小丁見
 息の音笛人と太刀のうり上げ真甲微塵と切付るう米吉のうり
 道見が腹をささる太刀引ぬと鐵壁も通きよと勢込んと突
 付るは道見見ようはうらめしやと尋常の小童にうらめしや
 羽客にうらめしやを連に手ちと見せんと又切りつゝぬがしと
 受うけく返してうらめしやの道見懐中より以前の
 羽巻ざくと袋を道見忽ちづき物に多くの金銀と所持する
 うらめしやとうらめしやと小童と殺さうの叶ぬとらう手馬手に
 切りとそく火花と散り挑め合ぬる所へ戻谷雲谷合の道見が
 手下に属し盗賊の形に打捨後は妻女と引候し各刀を振り
 つの二三人の旅人と追来きり雲谷が云くうらめしや衣服荷物道残り

多く度うぐし遣背や頭と切り〜と居丈高に旬き旅人等
 大に怒り〜はいつなる者あまふ斯く道洛と妨る〜は休に
 立去〜は汝等以て殺さば覺悟せよと立上き雲存猶も
 声あ〜は汝知らば我の朱武とよのあり是る女孫二娘とて
 萬夫不當の豪傑あるぞ悔ま後悔まなくやがて刀以恥せむ
 心得〜と旅人の雲存が刀をとり手とらると捕へ女とも傍を〜と
 蹴〜は名もあま悪生とも魯達め〜手あ〜と見〜と拳以
 もづく打擲く雲存さ〜に〜大地に〜と倒〜と
 旅人等怒り〜賊は徳〜に先衣服より剥取
 べ〜と無二無三に雲存夫婦を裸ま〜其時雲存歎
 云く我〜のいりれる因縁にや〜度く裸に〜度〜の〜一〜に

此所の物駭き往還と知り多〜斯く出〜誤りあれ〜にても
 命を〜の助〜と夫婦の例の手は合せ旅人の諷に平伏す〜と
 見〜る野藏〜の〜の〜いつ〜に飛来り物以〜云け旅人
 くれ〜れ〜と投出せす曲者〜と一同にあ〜も見〜て逃去ぬ
 時に鬼塚通見の先より米吉と戦ひ居〜身体大に疲き〜所
 け者共の来き〜歡び〜我先〜手〜小童と合手〜
 戦ひ〜真最中あり出合やと呼〜に〜得〜や〜と野藏が
 身構〜か〜め〜米吉はめ〜横〜突〜せの
 米吉は〜思〜十向〜飛去〜は〜に道見雲存
 下知と傳〜は傍に金財布の落〜は〜搜〜求め〜と呼
 つ〜又野藏に力は添〜と戦ひ半へ切〜入〜不思議や米吉の消が

如く夫よりく道見又より一々の小臺の逃くとも落せし
 金々に拾得む十分の利なるべしとてくさざり求めしと雲亦
 夫婦に立交り野藏もろともわれとれと探り廻きと闇夜
 にく所と分るむ松明とももきとて野藏が懐中より
 摺火打とていざ火と打つる折しほき虚空より火き
 剣と刃向にあり降りし下に一色あめと喚び声突きぬ
 この何ぞと松と燈しあらしと見き雲霧が頭より亀の
 尾より突貫ぬき息絶しと見ると道見等の大い
 驚き何の志いざなるべしとて松明とより立ち虚空と見き
 遙に松の杪よりふみしとて賊首とて殺すべきにと彼れ
 米吉が声より道見と始とて野藏も齒噛はあしとてく

小童は切りとるも此鬱憤とてくさくさやがて二人の刀を抜連し
 松明とよりくさくさ松が枝にどのぼくに米吉の折しと松が
 枝より飛下りけりるに落る刀と取らぬ彼の雲霧が死しとて尸乃
 傍より妻も女も刀ももらさ米吉と見かけつて夫のくさくと切り
 つくはちや物くしと一刀に切捨くさくの松は一陶やを撃ち
 葉のこるくつと道見も野藏も真逆にぞ落るくさくさ米吉
 手より立寄りめく打にきうつくさくさにも道見の太刀は拂
 て飛上り又野藏と鋒とそろつて必死にあらと揉合しとて
 米吉や勝りく亦二人が謀計ありく小腕孤の太刀尻に追
 らし引退ぞく

